



ナゴヤゴト

2021.9

経済産業省指定
伝統的工芸品

nagoyagoto



宝物に匹敵する美しさ
細かな仕事の「尾張七宝」

「金・銀・瑠璃・蝦蛄・瑪瑙・真珠・玫瑰」。仏教の経典に出てくる7種類の宝物ほどに美しいことから名付けられた七宝焼。金属の表面にガラス質の釉薬を何層にも焼き付けて完成する伝統工芸です。古代メソポタミア文明や古代エジプト文明に似たものがあり、ヨーロッパからシルクロードを通じて中国を経て日本に伝わったといわれています。

この地方では、1833年に名古屋の梶常吉が作り出したのが始まり。名工が多く生まれ、日本の七宝はパリ万博で世界へと知られるようになりました。失ってしまった技術もありますが、国を代表する伝統的な工芸品であるとして、経済産業省の伝統的工芸品に指定されています。

西区香呑町にある尾張七宝の窯元加藤七宝製作所は、初代の加藤亮三氏が創業。「赤透け」と名のついたルビーのような深い赤を出す釉薬の美

50年以上培った技術を 表現し発信し続ける

60代に入つてすぐ引退した勝己さん。「昔は5年かけて職人を育てていました。でも、いまはそれでは遅い。すべてのスピードが段違いにありました。私がいると、どうしても『そんなことやめた方がいいのではないか?』と邪魔をしてしまいますからね。息子には一切、口出ししません」と、経営からは完全に引いています。勝己さんの作品に触れた人が七宝焼を知り、加藤七宝製作所の技術を知ってもらおうのが、いまの自身の役割だと話します。「次はどんな作品をつくるか。体が追いつかないほどアイデアが浮かんでいきます。仕事が楽しくて仕方なく、幸せだと思います。スランプのときは旅行に出かけて、また仕事をします。『自分の仕事が好き』だという気持ちは、やはり大切ですね。信条は「飽きずに、懲りずに、こつこつと」。これが良い仕事をする秘訣だと思います。

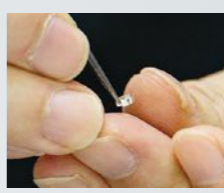


表紙を飾った作品。研磨の仕上げの違いでツヤのあるものとないものに。研磨は10種類以上の砥石や木炭などの道具を使う

三代目が温故知新でつなぐ技 加藤七宝製作所

美しき尾張七宝

1947年に創業した有有限会社加藤七宝製作所。1800年代後半から隆盛を迎えた尾張七宝の技術と、その美しさを引き継いでいる。



銀線を細工し表面につけ、釉薬を刺していく。この道具も作り手がおらず代用を余儀なくされている

しさに引き込まれ、七宝町での下積みを経て工房を構えました。「赤透け」は、いまでも加藤七宝製作所を代表する技術のひとつです。

2代目の勝己さんは七宝町で生まれ、若いころに学んだ日本画の技術を採用した作品を生み出してきました。尾張七宝に携わって半世紀以上。2010年には、尾張七宝初の伝統工芸士に認定されています。製作所の代表を約10年前に退いてからは3代目の芳朗さんに全権を委ね、作家として自身が納得する作品づくりに没頭。次の世代に技術を伝承しながら、花鳥風月を表現する日々を送ります。



尾張七宝の特徴である「有線」が見事。少なくとも完成までに7回の焼成工程を経て完成。700℃～900℃で焼かれる

存続の危機にある技術と美 新しい形で世の中に送る

尾張七宝の特徴は銀などで線を描き、そこに釉薬を焼き付ける「有線七宝」と「研磨」の技術にあります。「私が会社を継いだ当時、すでに多くの職人が廃業していました。100年前と作り方はほぼ変わっていないのに、道具をつくる職人はもういません」と現状を話します。

入社から5年で会社を任せられた芳朗さんが考えたのは、「どうすれば魅力を伝えられるか」。ウェブサイトの充実をはかり、技術や職人、商品について詳細に伝えてきました。新たな挑戦にも積極的です。「父は、多くの技術を残してくれました。希少技術もありますが、すべてが今の時代に必要なのではない。継承が難しい技術に固執するより、尾張七宝らしさを無くさず、変えていくことも大切。ネイルアーティストとの協働で完成した七宝のアート素材がありますが、そうした新しい商品で活路を求めたいです。尾張七宝にしか出せない美しさ、できない技術をしつかりと多くの人に伝え認めてもらいたい」と新たな可能性の模索を続けています。

(右)加藤 勝己さん
(左)加藤 芳朗さん

勝己さんは3人の弟子に技術を伝える。明治に生まれた名工の技術を目撃に日々、腕を磨く。作品づくりのほか、京都の老舗から譲り受けた100年前の未完成品の仕上げにも心血を注ぐ。「目標は変えたくない。頑固だからね」と笑う。芳朗さんはクラウドファンディングなどを活用し、他業種とのコラボレーションに積極的に取り組む。「父の存在は非常に貴重」と尊敬の目を向ける



上/銀線を施す「有線」が完了した表面。模様を少しずつ細工していく。中/七宝の釉薬は色ガラスを細粉した砂のようなもので、窯元によって調合が異なる。下/筆や竹べらで刺していく釉薬。釉薬を刺すには水分の調整が肝となる

INFORMATION

加藤七宝製作所
名古屋市西区香呑町4-31
営業時間
平日9時～18時
052(531)1382
美しい商品は
コチラから

